

山本芳翠作《十二支》研究

黒木 彩香 (宇都宮美術館)

明治期の洋画家山本芳翠(嘉永3-明治39年[1850-1906])による《十二支》(明治25年[1892])は、三菱財閥二代目総帥・岩崎彌之助の依頼により制作された油彩画の連作であり、「十二支」を主題とした12図より成る。明治25年開催の明治美術会第四回春季展覧会に12点揃って出品された本作は、石井柏亭らによって芳翠の代表作と位置付けられている。先行研究では12点それぞれの主題特定が行われる一方、芳翠がパリ留学時代に師事したジャン＝レオン・ジェロームが歴史画の大家であったことを根拠に、本作を西洋における歴史画の日本的翻訳であるとし、西洋絵画との関連で議論する研究が大勢を占める。唯一、高階絵里加氏が浮世絵とのかかわりについて言及しているものの、その本質は性質を異にすると述べており、あくまでも油絵、留学体験という枠の中で本作を性格づけようとする傾向がある。しかし本発表は、本作に見られる多様な要素を西洋絵画の学習と咀嚼といった面からの解釈だけでなく、日本美術の伝統的画題「十二支」の作品として検討、解釈することによって、作品の新たな位置付けを行うものである。

第一に、本作に表れる日本美術の要素を個々の画面分析によって検討する。主題、モチーフ、構図などに江戸期までの日本美術学習や、浮世絵に見られる表現が援用されていることを指摘する。また「寅」「午」に見られる徳川家の主題や、「巳」「酉」の日本神話主題は、本作の描かれた明治初期における風潮を強く反映したものであることを併せて示す。

第二に、日本において「十二支」という画題がどのように描かれてきたのかを概観する。室町中期に成立したとされる「十二類絵巻」に始まる十二支主題作品群においては、十二支獣によって主題を表現する伝統が存在することを指摘する。

第三に、19世紀の浮世絵の画題として流行した「十二支」主題の浮世絵作品と山本芳翠《十二支》の両者を、①形式、②十二支獣の表現、③描かれた題材、④絵解きを促す性格、の4つの観点から比較し、その類似点と相違点を確認する。全ての点において類似が見られるが、③については十二支主題の浮世絵と価値観を同じくしながらも、芳翠《十二支》の方がかなり自由度の高い選択がされていることが判明する。対して④絵解きについては、画中に人物名や説明的テキストを書くことが一般的でない油彩画の性質によって、芳翠《十二支》のそれは難易度が高くなっていることが分かる。

芳翠の師・五姓田芳柳は浮世絵師歌川国芳に師事した画家であり、したがって芳翠は、草創期の洋画家であると同時に、浮世絵師の系譜の最後の頁に記される絵師でもある。その芳翠が描いた本作は、単に西洋の歴史画を翻訳しただけのものではなく、「十二支」主題作品の掉尾を飾る作品でもあり、特に江戸以来の日本美術要素が盛り込まれた極めて日本的な性格をもつ作品であると結論づける。